



先進国型の 大学入試とは



株式会社 日本経済研究所

常務執行役員

地域本部 上席研究主幹 佐藤 淳

日本の大学入試制度は知識重視に偏っている。キャッチアップが終わり、オリジナルが問われる時代に相応しいものではない。フランスの入試制度を参考に、思考力を問う試験に改革を検討すべきであろう。

地方創生では人口減少の回避がクローズアップされてきたが、本シリーズでも何度か言及したように、人口が減ったとしても、内需型から外需型へシフトできれば、問題はない。これは巷間言われていることと異なるので、どんな反応があるのか、興味深いところであったが、筆者が関連する自治体では思いのほか冷静に受け止められた。いやむしろ、そう思っていましたというのである。

よく言われることだが、日本の場合は往々にして、現場は優れているが…というパターンがあるとされる。地方創生では、現場市町村の感覚は優れているが、中央の言説はどうもということなのかも知れない。

この種の話には、戦前の兵隊は頑張ったが将校はダメとか¹、工場は優れているが本社が弱いなど²、バリエーションが豊富にある。我が国は、この点を改善しないと、クリエイティブな先進国にはなれないのではないだろうか。

エリート選抜には事実上大学入試が用いられている。これは世界中共通である。従って、大学入試問題をみれば、それぞれの国が期待するエリート像が浮かび上がる。

まず、我が国であるが、マークシートのセン

ター試験に象徴されるように、知識を問うクイズ型の設問が多い。純粹に思考力が問われるのは、二次試験に現代国語がある場合程度だろう。それも、我が国の対極にある、フランスの哲学に比べると単なるクイズかも知れない。

フランスにおいてセンター試験に相当するのはバカロレア（大学入学資格試験）である。必修である哲学が試験の性格を象徴しているとされる。さて、その設問は、「あらゆる信仰は理性に対立するか？（2012）」といったものである。一般の大学より上位エリートを選抜するグランゼコールも同様で、「体は美術品に成り得るか？（2014ENA）」といった具合である。これを数時間かけて論述するのである。正直手も足も出ない。

フランスにおいて、知識重視が問題視されたのは19世紀に遡るが、同時代の日本にも同じ問題意識を持った人物がいた。吉田松陰である。松陰は科挙型の教育から、熟議型の教育に舵を切った。その効果は言うまでもないだろう。松下村塾から百数十年を経て、漸く我が国でも大学入試試験の改革が実施されつつある。2020年度からは、短文記述が、2024年後からは記述式の本格導入が検討されている。その程度で事足

1 ノモンハンで日本軍と戦ったジュコフ元帥は日本の下級士官、下士官、兵の戦意、能力を高く評価した一方、高級士官たちの能力に対する疑問を回想録で書いているとされる
2 藤本隆宏（2004）「日本のもの造り哲学」日本経済新聞社

りるのか不安ではあるが、一步前進である。

さて、フランスの状況をもう少し紹介しよう。坂本(2012)³は、「フランス教育制度の特徴は、リセ（高等学校）最終学年における哲学教育と、バカロレア（大学入学資格試験）における哲学試験である。文系、理系を問わず、すべての高校生が哲学を必修として学び、哲学試験はバカロレアの第一日目の最初の科目として実施される。この哲学の特権的な位置こそが、フランス人の思考力を鍛え、またフランスの哲学的伝統を守り育てていることは疑いがない。」としている。

また、細尾(2010)⁴は、バカロレアの経緯について、次のように述べている。1808年の創設より第二次大戦前までは知識を記憶する学力が問われたが、その後は理解力を問うようになった。我が国はフランスでいうと戦前に相当するらしい。

また細尾は、理解力の対象レベルは徐々に平均に近づいていると整理している（下表②→③→④）。エリート層はバカロレア⁵ではなく、グランゼコールでということかも知れない。

もっとも、この種の小論文のようなテストには、採点者の主観が入りやすく、信頼性や公平性の保証が困難との欠点がある。フランスにおいても、そのような問題意識から、客観テストの導入が検討されたこともあった。しかし、単純な精神や反応の速さしか測れず、思考の緻密さや表現の優雅さ、論証力などの洗練された能力は評価できないとして退けられている。公平性は、採点者の研修や統計的調整によって改善されてきているとされる。

フランスの大学入試システムは長い歴史と経験に裏打ちされたものであり、我が国に単純に導入することは困難ではある。しかし、大量生産・コストダウンといったキャッチアップ時代のやり方では、東アジア諸国等との消耗戦に巻き込まれるだけであり、アイデアやデザインを武器とした高付加価値型の産業構造に転じない限り未来はない。そのためには少しずつでも、フランスの要素を取り入れる以外にないだろう。大学入試制度の改革に向けた議論の進展に期待したい。

■フランスのバカロレア（大学入学資格試験）試験問題で問われた学力の変遷

能力	知識		高校の教育内容の範囲	高校の教育内容の範囲外
	質	水準		
「理解」を表現する		高い		②～1985
		平均	④ 1997～ ←	③～1996 ←
		低い		
記憶する				①～1940

（出所）細尾（2010）

3 坂本尚志（2012）「バカロレア哲学試験は何を評価しているか？」京都大学高等教育研究第18号、p.53

4 細尾晴子（2010）「フランスのバカロレア試験における評価観」京都大学大学院教育学研究科紀要第56号

5 バカロレアの保有率は6割程度